

『回回館訳語』音訳漢字再考

更科慎一

1. はじめに

本稿筆者はかつて、「『回回館訳語』音訳漢字の声調体系」（更科2002）を発表し、明代の外国語学習書『華夷訳語』の一篇を成す『回回館訳語』の「雑字」（漢語とペルシャ語の対照語彙）部分においてペルシャ語の表記に用いられた音訳漢字の対音関係を考察して、この資料を中国語音韻史の資料として利用することを試みた。筆者はその中で、ペルシャ語の単語を表記している音訳漢字が、語中の位置や母音の長短によって一定の声調調類を選好する傾向があることを見出し、現代イランの標準ペルシャ語の代表的音調型をもとに、音訳がなされた当時の中国語の声調調値を推測した。

2002年の拙稿の段階では、筆者は所拠テキスト及びペルシャ語のローマ字転写、それに語項目の解釈など、多くの面にわたって、この資料に対する先行研究である本田1963に依存し、ただ本田1963が参照していない中国国家図書館蔵の2種の影印を見た程度であった。そして、考察に用いた資料の範囲については、日本の学界で乙種本と呼ばれる四夷館編纂のテキストに限定し、会同館で編纂されたいわゆる丙種本の『回回館訳語』は扱わなかった。

その後本稿筆者は、『回回館訳語』のいくつかのテキスト（影印や電子版を含め）を新たに見ることができ、また2008年に刊行された劉迎勝氏の大著《〈回回館雑字〉与〈回回館译语〉研究》を目にしたこともあって、二十数年前の自身の小考を再検討するのを感じながらも、なかなか果たせないうでいた。本稿では、2002年の拙稿発表以降に自身が利用し得た諸本や上述の劉2008等も参照しつつ、『回回館訳語』雑字に見える音訳漢字を、中国語音韻史の資料として利用する可能性を改めて探求したい。考察対照の資料はやはり乙種本を中心としつつ、丙種本と乙種本の音訳漢字の差異についても検討したい。

2. 『回回館訳語』のテキストについて

『回回館訳語』のテキストは、中国語圏、日本、ヨーロッパに散在している。諸先行研究の記載を参照して、主なテキストについて概観すると以下ようになる。

乙種本。上にも述べた通り、乙種本は四夷館で作成されたものである。四夷館は明の永楽5年（1407）に設立され、上表文や勅諭など、異民族と明廷の間を往来する文書の翻訳と訳字生の養成を使命とした。四夷館の中で、ペルシャ語を所掌する「回回

館」は四夷館の設立当初に設置された分署であり、『回回館訳語』は当然回回館において作成されたと考えられる。一般に乙種本『華夷訳語』が明代のいつに成ったのか、その正確な年代は不明であり、現存する『回回館訳語』の成書年代も永楽5年とは決められない。中国に所在する代表的な本としては復旦大学図書館蔵本（明鈔本）と北京図書館蔵『回回館雑字』（清初同文堂鈔本）、同じく北京図書館蔵『回回館訳語』（清初刻本）があるほか、台湾故宮図書館蔵の明刻本がある。日本に所在する代表的なテキストには東洋文庫蔵の明鈔本があり、一方ヨーロッパに所在する代表的なテキストにはベルリン本（即ち Hirth 氏将来本。明鈔本）、ロンドン大英博物館本（明刻本）、パリ・アジア協会本（清康熙年間鈔本）、パリ国家図書館本（清鈔本）などがあり、また西田1972:11によると、ロシアのサンクトペテルブルグにも一本が存在する。

乙種本は対訳語彙（「雑字」）のほか漢文と民族語の対訳からなる文例集「来文」を含んでいることが特徴である。現存する乙種本の諸本には来文を含まないものや、逆に来文のみを含むものが存在する。来文は、固有名詞の音訳が漢文部分にいくつか現れることを除いて、音訳漢字を含まないため、本稿の考察の対象とはしていない。

丙種本。丙種本は対訳語彙のみから成り、乙種本の来文に相当する内容を含まない。丙種本を作成した会同館は永楽6年（1408）に設立され、外国からの使節の応対を担当するほか口頭通訳の養成も行っていた。そのため、一般に丙種本の言語は乙種本と比べて口語的であるとされる。中国には北京図書館所蔵の貞節堂袁氏鈔本（清代）がある。日本所蔵のテキストの中では阿波国文庫本と静嘉堂文庫本が回回館を含み、よく利用される。ヨーロッパではロンドン東洋・アフリカ学校（School of Oriental and African Studies, University of London）に明代の写本が所蔵されている。

本稿筆者は、音訳漢字に限って言うならば、現在までのところ、乙種本に関して次の諸本を確認するを得ている（一部の本に示している略称は、本稿の以下の記載中に用いることがある）：

◆明代テキスト

(1) ベルリン本。明鈔本。現所蔵先の Staatbibliothek zu Berlin が web 上 <https://digital.staatsbibliothek-berlin.de/suche> に公開している写真による。【略称：柏林本】

(2) 東洋文庫本。明鈔本。XI-5-2及びその写真帖 XI-5-3による。

(3) 復旦大図書館蔵本。明鈔本。愛如生『四庫存目書』による電子版による。【略称：復旦本】

(4) 台湾故宮図書館蔵本『華夷訳語不分卷』。明経廠本。国立故宮博物院古籍輿図検索系統 (<https://rarebooks-maps.npm.edu.tw/index.php> より「華夷訳語」で検索)による。

【略称：故宮本】

◆清代テキスト

- (5) パリ国民図書館本。清鈔本。劉2008所載の影印による。【略称：巴里本】
- (6) 中国国家図書館蔵『回回館雜字』。清同文堂鈔本。『北京図書館古籍珍本叢刊6 經部』所収の影印による。【略称：北雜本】
- (7) 中国国家図書館蔵『回回館訳語』。清初刻本。『北京図書館古籍珍本叢刊6 經部』所収の影印による。【略称：北訳本】

この7本に共通する内容は、18の門類に分かれた777項目の対訳語彙¹であり、本稿ではこれを「正編」と呼ぶ。本稿では正編の各項目に、1から777までの番号を附して引用に備える。この番号は本田1963に従ったものである。

7本のうち復旦本にのみ、64項の増補語彙がある。この増補語彙は門類に分かたれず、正編の最後に位置する通用門に続いていて、かつ語彙の内容も通用門と共通する(動詞・形容詞・副詞・抽象名詞などが多い)ので、通用門に対する増補の意図であったのかもしれない。本稿ではこの増補語彙を「復旦本増補部分」と呼ぶ。

ベルリン本と復旦本には、15の門類に分かれた233項目の増補語彙がある。本田1963では、ベルリン本のこの増補語彙に通し番号778-1010を附しており、本稿でも参照の便の為此の通し番号を用いる。

丙種本に関しては、次の二本を見た。いずれも、17の門類に分かれた674項の対訳語彙から成る。

- (1) 阿波国文庫本。(東洋文庫蔵の景照本による)
- (2) 中国国家図書館蔵貞節堂袁氏鈔本『訳語』中に含まれる『回回』の部分。(清代。『北京図書館古籍珍本叢刊6 經部』所収の影印による。)【略称：袁氏本】

本田1963では、丙種本の各項に対して、乙種本からの通し番号1011-1684を附している。本稿で丙種本の項を引用する際も、参照の便を考えて、本田氏の通し番号を用いる。

3. 先行研究、及びその所拠テキストについて

『回回館訳語』の先行研究のうち、本稿にとって特に重要なもの三篇について、ここで特に説明しておきたい。

- (1) 田坂興道1943, 1944, 1951 : 「『回回館訳語』語釈 (一) (二) (三) (補正)」

『回回館訳語』に対する日本最初の本格的な研究である。論文の直接の対象となつて

¹ 但し、ベルリン本は衣服門の531「襟」、532「袖」、533「綿」、534「帽」の4項について項全体を欠く；北雜本は地理門の95「陝西」と96「河西」の音訳漢字を欠く；東洋文庫本は通用門冒頭の6項(670「有」、671「無」、672「同」、673「異」、674「是」、675「非」)のベルシャ文字欄を欠く；北訳本は通用門775「進貢」の音訳漢字を欠き、776「永遠」と777「太平」の2項については項の全体を欠く。

いるのは乙種本と丙種本の雑字の部分であるが、来文についても一部言及がなされている。(一)は序論、(二)は語釈(発表されたのは天文門のみ)、(三)は結論。補正は戦後に出て、(一)～(三)の内容を訂正・加筆している。乙種本は東洋文庫本とパリ・アジア協会本が参照され、丙種本では静嘉堂本と阿波国本が参照されている。従って田坂論文の研究対象資料の範囲は、乙種本正編の777項と丙種本の674項に限られ、ベルリン本・復旦本の続編、及び復旦本増補部分を含んでいない。

田坂氏はその(二)において、乙種本と丙種本の天文門の語彙項目49項(乙、丙両本に共通の項目は1項に数える)について、漢語見出し、音訳漢字、乙種本のペルシャ文字の翻字を掲げ、ペルシャ語の比定語を(時にアラビア語や古代ペルシャ語にまで溯って)示しつつ語釈を行っている。田坂氏は音訳漢字の検索には特に注意を払っており、ある語項目にある音訳漢字が初出すると、その漢字が出現した乙種本と丙種本の語彙項目を全部挙げる体裁を取っている。例えば天文門第一条「天」(乙)阿思媽恩、(丙)阿思媽の語釈では、出現した音訳漢字は全て初出であり、かつ“阿”や“思”の用例は資料中において非常に多いので、この一項に対する語釈だけで8頁近くを費やす結果となっている。語釈は天文門のみが掲載されているが、地理門以下の各項の音訳漢字やペルシャ語の比定形なども、その一部が本文の随所で引き合いに出されており、参照できる。

(2) 本田実信1963:『『回回館訳語』に就いて』

本田1963は乙種本・丙種本に対する総合的な研究であり、乙種本雑字について5種(ベルリン本、東洋文庫本、パリ国民図書館本、パリ・アジア協会本、ロンドン・大英博物館本)、丙種本については3種(ロンドン東洋・アフリカ学校本、阿波国本、静嘉堂文)のテキストを利用して校本を作成し、校勘記も附している。底本としているテキストは乙種本がベルリン本、丙種本はロンドン本である。乙種本の来文については、ベルリン本、東洋文庫本、パリ国民図書館本、内閣文庫本(清代の鈔本)の四本を利用し(パリ・アジア協会本とロンドン・大英博物館本は来文を欠く)、この四本に現れる26篇(重複するものを除いた数)について、漢文とペルシャ語文(ローマ字転写による)の原文を示している。

本田1963の雑字部分の校本では乙種本雑字と丙種本の語彙項目1684箇条について、見出し漢語、音訳漢字、ペルシャ語の比定語(ローマ字転写による)、及びそれぞれの項のペルシャ語に対する英訳を掲げているほか、各項を構成する語(word)の語源(ペルシャ語固有語、アラビア語、トルコ語、モンゴル語、中国語など)をローマ=アルファベットの略号で表示している。文章形式での語釈的記述はない。

(3) 劉2008《『回回館雑字』与『回回館译语』研究》

本書は600頁を超える大著で、乙種本についてはベルリン本、東洋文庫本、パリ国民図書館本、ロンドン本、北雑本、北訳本を目睹したといい、一方丙種本に関しては袁氏本を参照したほか、ロンドン東洋・アフリカ学校本も見ているという。劉氏は乙種本については北雑本を、丙種本については袁氏本を最も重視し、それぞれ底本としている。この三本のいずれも、田坂1943, 1944, 1951及び本田1963が利用していない本であることが注意される。本書には、乙種本正編についてはパリ国民図書館本の、同統編についてはベルリン本の、また丙種本については袁氏本の影印が、それぞれ転載されている。

劉2008の主要部分は、乙種本と丙種本の雑字の全項目に対する語釈である。乙種本の来文部分は扱われていない。語釈においては、見出し漢語、音訳漢字、ペルシャ語形が示され、ペルシャ語形は、ペルシャ文字とそのローマ字転写が記されている。ペルシャ文字がすでに示してあるためか、ローマ字転写の方は、もとのペルシャ文字面がそこから復元可能であるという意味での転写ではなく、より現代ペルシャ語の発音に近づけた転写法となっており、例えばアラビア語に由来し、現代ペルシャ語では他の子音と同音になっているいくつかの子音字母の区別などは捨象されている。なお、ペルシャ文字面・ローマ字転写のいずれにおいても、時折誤植があるので、参照に当たっては注意を要する。

諸本間の異同については、各項に対する語釈の中で細かに触れられているほか、各項で比定されているペルシャ語形に対する語学的分析も詳しい。歴史や文化の観点から重要な語彙項目では、しばしば文献を引用しつつ、詳細な考察を行っている。例えば丙種本104番「西洋布」の項に対する語釈（劉2008:359）などはほぼまる二頁に及ぶ。

本稿を草するにあたって、特に各語項目のペルシャ語の解釈については、以上の三点の先行研究に負うところが非常に大きい。中でもペルシャ語のローマ字転写に関してはほぼ本田1963によっているが、後に述べるように、本田氏の転写をわずかに修正したところがある。

4. 本稿におけるペルシャ語形式について

本稿で使用するペルシャ文字の転写方式については、次のようにする。

(1) 子音

| 字母 | 転写符号 | 字母 | 転写符号 | 字母 | 転写符号 | 字母 | 転写符号 |
|----|------|----|------|----|------|-----------|------|
| ب | b | د | d | ض | ḍ | گ | g |
| پ | p | ذ | z | ط | ṭ | ل | l |
| ت | t | ر | r | ظ | ẓ | م | m |
| ث | s | ز | z | ع | ‘ | ن | n |
| ج | j | ژ | ž | غ | γ | و | v |
| چ | č | س | s | ف | f | ه | h |
| ح | ḥ | ش | š | ق | q | ی | y |
| خ | x | ص | ṣ | ک | k | ء (hamza) | ’ |

(2) 母音

a, ā, i, ī, u, ū; ai, au

乙種本『回回館訳語』においては、現代ペルシヤ語形の p, č の一部を、それぞれ字母 b, j で表記した例が多々あるほか、g は非常にしばしば字母 k で表記している。これらの事例は多くの場合、音訳漢字の示す音のほうがかえって現代ペルシヤ語音と一致するので、本稿では p, č, g で転写する。なお本田1963では、この種の字母を転写する際、[p]、[č]、[g] のように “[]” をつけて表記している。

実際の運用においては、本稿におけるペルシヤ語形の転写は、基本的に本田1963に従ったが、劉2008の意見が妥当であると思われた場合は、劉氏に従って改めたところがある。

5. 乙種本の諸テキストにおける音訳漢字の異同について

5. 1. 乙種本『回回館訳語』音訳漢字の「声調分布傾向」について

本稿筆者は更科2002において、乙種本『回回館訳語』でペルシヤ語を表記するために用いられた漢字のとり声調調類が、語中の位置（単音節・複音節語の頭音節・複音節語の末音節・三音節以上の語の中間音節）及び母音の長短との間に一定の対応関係を有することを見出した。今、更科2002の結論を簡潔にまとめれば下のようになる。

語中の位置から見て：

(1) 平声字（大半は清平）・去声字・入声字は、単音節語、及び複音節語末音節に多く用いられる。

(2) 上声字は、複音節語頭音節に多く用いられる。

母音の長短から見て：

(3) 平声字は、単音節語及び複音節語末音節の中で長母音音節の表記に多用される。

(4) 去声字は、単音節語及び複音節語末音節の中で短母音音節の表記に多用される。
 (5) 入声字は、統計では傾向性が見えないが、分節音素に関して同音で調類が異なる字が用いられているか否か、用いられている場合にその調類が何か、いかなる使い分けがなされているかなどの状況を一字一字調べていくと、去声と同じく、短母音音節の表記に比較的多用されていることがわかる。

この声調分布傾向は、更科2002において、ほとんど本田1963の校本（底本はベルリン本）に頼って導き出したものであるが、乙種本の他のテキストや丙種本にはどの程度当てはまるか。以下、考察してみたい。

5. 2. 乙種本：明代群と清代群

音訳漢字の異同から見ると、今回目撃できた七種類の「雑字」諸テキストは、明代の鈔本/刻本とされる諸本（以下、明代群と称す）と、清代の鈔本/刻本とされる諸本とに二分される傾向が見て取れる。以下に、清代群と明代群の分離傾向を示す音訳漢字の例を挙げる。下で「巴里」とするのはパリ国民図書館本である。

| テキスト略称：故宮 | 東洋 | 復旦 | 伯林 | 巴里 | 北雑 | 北訳 |
|-------------------------|----|----|----|----|-----|----|
| テキストの時期：明 | 明 | 明 | 明 | 清 | 清 | 清 |
| 96「河西」 ² 第二字 | 屋 | 屋 | 屋 | 渥 | (缺) | 渥 |
| 106「晚」第一字 | 捨 | 捨 | 捨 | 捨 | 舍 | 舍 |
| 140「聖」第一字 | 迫 | 迫 | 迫 | 拍 | 拍 | 拍 |
| 148「母」第一字 | 馬 | 馬 | 馬 | 媽 | 媽 | 媽 |
| 248「誇」第一字 | 髓 | 髓 | 髓 | 隨 | 隨 | 隨 |
| 296「商議」第一字 | 默 | 默 | 默 | 母 | 母 | 母 |
| 374「丹墀」第一字 | 把 | 把 | 把 | 巴 | 巴 | 巴 |
| 447「茄」第二字 | 廷 | 廷 | 廷 | 挺 | 挺 | 挺 |
| 449「薑」第三字 | 必 | 必 | 必 | 比 | 比 | 比 |
| 482「棋」第一字 | 捨 | 捨 | 捨 | 舍 | 舍 | 舍 |
| 497「錐」第二字 | 路 | 路 | 路 | 魯 | 魯 | 魯 |
| 526「絹」第三字 | 孤 | 孤 | 孤 | 姑 | 姑 | 姑 |
| 561「甜」第一字 | 史 | 史 | 史 | 石 | 石 | 石 |
| 563「酸」第二字 | 路 | 路 | 路 | 魯 | 魯 | 魯 |
| 591「琥珀」第三字 | 勒 | 勒 | 勒 | 兒 | 兒 | 兒 |

² 本稿で語彙項目を挙げる際、漢語見出しには「」を附して示すのを原則とする。音訳漢字には括弧の類を附さないが、特に漢語見出しなどから区別する必要がある場合は“ ”をつける。

| | | | | | | | |
|-----------|---|---|---|---|---|---|---|
| 665「双」第一字 | 住 | 住 | 住 | 住 | 住 | 主 | 主 |
| 683「近」第三字 | 低 | 低 | 低 | 底 | 底 | 底 | 底 |
| 686「精」第二字 | 路 | 路 | 路 | 路 | 魯 | 魯 | 魯 |
| 687「粗」第二字 | 路 | 路 | 路 | 路 | 魯 | 魯 | 魯 |
| 722「用」第一字 | 把 | 把 | 把 | 把 | 巴 | 巴 | 巴 |
| 724「高」第二字 | 藍 | 藍 | 藍 | 藍 | 郎 | 郎 | 郎 |
| 732「過」第一字 | 古 | 古 | 古 | 古 | 故 | 故 | 故 |
| 748「総」第三字 | 母 | 母 | 母 | 母 | 木 | 木 | 米 |

これらの中には、374「丹墀」、482「棋」、591「琥珀」、683「近」の例のように、明代群の中でベルリン本のみが清代群と同じ文字遣いであるものや、106「晚」、397「鶴」、482「棋」の例のように清代群の中でパリ本のみが明代群と同じ文字遣いであるものも見られる。「雑字」正編全体では、ベルリン本が清代群の文字遣いである例は5例あり、パリ本が明代群の文字遣いである例は7例ある。ベルリン本は明代群の中で比較的遅い成立である可能性があり、一方パリ本は祖本が他の清代群と比べて比較的古いものである可能性がある。

文字遣いが明代群と清代群とに二分される上掲の音訳漢字を比較すると、明代群の方が『回回館訳語』音訳漢字の声調分布の傾向に忠実である場合が多い。下にその例を示すが、その際、その音訳漢字の語中の位置がわかるように、東洋文庫本における語全体の音訳漢字とその語のペルシャ文字綴り（ローマ字転写）を掲げる。

(1) 複音節語の語頭音節の音訳漢字（第一字）。明代群は上声字で、清代群は非上声字であるもの（明代群は5.1の傾向(2)に合致）：

106「晚」：捨榜噶黑 *šabāngāh*（捨伯林を除く明代群、清上一舎巴里を除く清代群、清去³）

148「母」：馬得兒 *mādar*（馬伯林を除く明代群、次濁上一媽清代群、陰平）

248「誇」：髓法忒 *šifat*（髓明代群、清上一隨清代群、全濁平）

374「丹墀」：把兒噶黑 *bārgāh*（把伯林を除く明代群、清上一巴清代群、清平）

482「棋」：捨忒藍知 *šatranj*（捨伯林を除く明代群、清上一舎巴里を除く清代群、清去）

561「甜」：史里尹 *šīrīn*（史明代群、清上一石清代群、全濁入）

722「用」：把衣思貪 *bāyistan*（把明代群、清上一巴清代群、清平）

732「過」：古得石貪 *gudaštan*（古明代群、清上一故清代群、清去）

(2) 複音節語末音節・短母音・閉音節の音訳漢字。明代群は去声字、清代群は非去声字であるもの（明代群は5.1の傾向(4)に合致）：

497「錐」：堵路夫石 *dirafš*（路明代群、次濁去一魯清代群、次濁去）

³ 上声の音もあるけれどもここでは去声に解しておく。

563「酸」：土路石 *turuš* (同上)

665「双」：住夫忒 *juft* (住明代群、全濁去—主巴里を除く清代群、清上)

686「精」：堵路思忒 *durust* (同上)

687「粗」：堵路石忒 *durušt* (同上)

(3) 末音節・長母音の音訳漢字。明代群は清平字、清代群は非清平字であるもの(明代群は5.1の傾向(3)に合致)：

683「近」：納子低克 *nazdik* (低伯林を除く明代群、清平—底清代群、清上)

明代群の方が音訳漢字の声調選択の傾向に忠実である事実から見て、明代に作成された最も古い祖本の段階において、声調選択の傾向はすでに存在しており、清代群は伝写や改訂の仮定でその傾向が若干弱められたと解釈できる。

音訳漢字以外の面でも、明代群と清代群を分かち特徴がある。それは、現代ペルシャ語の子音 /g/ に相当するペルシャ字母の表記である。本田1963や劉2008の転写形式から見て、雑字における /g/ は正編に73例、続編に22例、計95例が見える。明代群では、これらは全て k に相当する字母 (*kāf*, ک) で表記されるが、唯一330「項」革児丹 *gardan* の頭子音だけは、k ではなく g の字母で書かれる⁴。但し、「項」の頭子音に用いられた g は、現代ペルシャ文字で /g/ を表す字母 *gāf* (گ) ではなく、*kāf* の上に三点がついた字母 (ک) である。明代群のベルリン本、東洋文庫本、復旦本は全て同じ状況であるが、注目されるのは清代群における子音 /g/ の表記状況である。清代群は続編の語彙を欠いているため、比較対象は正編の73例に限られるが、清代群では少なからぬ項において (گ) が書かれているのである。北雑本、北訳本、パリ国家図書館の三種の清代本における {g} (گ) の出現度数は、次の通りである：

北雑本：47回　北訳本：27回　パリ本：33回

各本において g (گ) が現れる語は必ずしも一致していない。そのことも興味深いのが、明代においてほとんどなされなかった /k/ と /g/ の区別が清代群に至ってなされる傾向があることは、明から清に至る間になされた内容の更新であると言える。乙種本『華夷訳語』においては、清代の鈔本や刊本とされるものも、内容はひたすら明代の旧を襲うのが通例であり、『回回館訳語』の清代群に見られるこのような更新は、珍しいことである。

5. 3. 乙種本明代群音訳漢字の内部差異

明代群の中での音訳漢字の異同について言えば、目睹し得た四本には、ある一本だ

⁴ 東洋文庫本などにおいて「項」の頭子音のみに k ではなく g が現れる事実については、田坂1943a:130において既に指摘されている。

けが他の三本と異なる字に作っている用例がある。例えば126「凍」の場合、明代群のうちベルリン本だけが“非思児丹”に作り、他の三本は皆“非洗児丹”に作り、第二字に異同がある。ベルリン本は19箇所において他本とは異なる文字を用いており、復旦本は11箇所において他本と異なる文字を用いている（但し、いずれも誤字・脱字・顛倒を除く）。これに対し、東洋文庫本だけが他本と異なる文字を用いた事例は2、台湾故宮本だけが他本と異なる文字を用いた事例は3であった。今、紙幅の関係上例の全ては挙げず、任意に、ベルリン本と復旦本からは2つずつ、東洋文庫本と台湾故宮本からは1つずつを、それぞれ挙げる：

◆ベルリン本の用字が他と異なる（19例）

| | 故宮 | 東洋 | 復旦 | 伯林 | 巴里 | 北雜 | 北訳 |
|-----------|----|----|----|----------|----|----|----|
| 126「凍」第二字 | 洗 | 洗 | 洗 | <u>思</u> | 洗 | 洗 | 洗 |
| 396「鷺」第一字 | 鮓 | 鮓 | 鮓 | <u>扎</u> | 鮓 | 鮓 | 鮓 |

◆復旦本の用字が他と異なる（11例）

| | 故宮 | 東洋 | 復旦 | 伯林 | 巴里 | 北雜 | 北訳 |
|------------------------|----|----|----------|----|----|----|----|
| 345「灾」第二字 | 法 | 法 | <u>夫</u> | 法 | 法 | 法 | 法 |
| 738「等」第一字 ⁵ | 尹 | 尹 | <u>因</u> | 尹 | 尹 | 尹 | 尹 |

◆東洋文庫本の用字が他と異なる（2例）

| | 故宮 | 東洋 | 復旦 | 伯林 | 巴里 | 北雜 | 北訳 |
|------------|-------------------|----------|------|------|------|------|------|
| 763「顛倒」第一字 | [立巴] ⁶ | <u>迫</u> | [立巴] | [立巴] | [立巴] | [立巴] | [立巴] |

◆台湾故宮本の用字が他と異なる（3例）

| | 故宮 | 東洋 | 復旦 | 伯林 | 巴里 | 北雜 | 北訳 |
|----------|----------|----|----|----|----|----|----|
| 43「江」第二字 | <u>地</u> | 得 | 地 | 地 | 地 | 地 | 地 |

明代群の中では、ベルリン本と復旦本には独自の文字遣いが多い。ベルリン本にはこれとは別に清代群と共通の文字遣いも4箇所認められることから、祖本が明代群の中で比較的新しい可能性がある。一方東洋文庫本と台湾故宮本は独自の文字遣いが非常に少ないので、初期の音訳用字をよく保っている可能性がある。

ベルリン本と復旦本の基づく祖本が明代群の中で比較的新しい成立であることをうかがわせる根拠は音訳漢字以外にもある。それは、この二本のみに「続編」の内容があることである。復旦本には更に、2に述べたように、他本にない64項の増補語彙もある。両本に見えるこれらの増補語彙は、正編の「通用門」に分類される動詞や形容

⁵ 筆者は未確認ながら、本田1963の校勘記によれば、問題の音訳漢字を、復旦本の他、パリ＝アジア協会本も“因”に作っている。

⁶ [立巴]は偏が立、旁が巴である字で、ベルシャ語の音連続 pā の対音字。

詞・副詞・抽象名詞が多い。これらは来文において頻繁に用いられる語であり、筆者は回回館来文についてまだ綿密な考証は行っていないので確実なことは言えないにせよ、両本における増補は、来文の読解や作成に必要な語彙を補足する意図があった可能性がある。表文や勅書などの文章は、四夷館提督の郭鑿が嘉靖二十一年（1542）に上奏した結果、四夷館において新たに教育されるようになったものであるとされ、それ以前の四夷館では専ら雑字が教学されていた（任2015:157）。石田1944/1973:152-153は、乙種本に「来文」が付けられるようになったのは郭鑿の上奏以後のころではないかと推測している。『華夷訳語』という書物の構成要素としての来文と雑字の成立はそれぞれ別に扱わねばならないことであり、あるテキストに来文が附されていれば同テキストの雑字の成立年代も必ず新しいと言うことはできない⁷。ただ一般に乙種本雑字の増補語彙は来文と関連してつけられているように思え⁸、増補語彙をもつベルリン、復旦両本が、より後の時代の修訂を経ている可能性は十分に考えられる。

5. 4. 乙種本清代群音訳漢字の内部差異

劉2008:19では、国家図書館蔵の二種の清代テキスト（北雑本、北訳本）を比較し、その祖本の成立年代について、北雑本が北訳本よりも早いと推測している。劉氏は、北雑本の漢文の筆跡は東洋文庫本とよく似ており、東洋文庫本と同一の師門の生徒の手になるものであろうと推測している。ベルシャ語は毛筆をもって書かれているが、その筆法は（劉氏によって蘆ペンを以て書かれたと鑑定された）東洋文庫本に劣り、綴りの間違いも東洋文庫本よりも多いと言う。

本稿にとって重要なのは、劉2008:19が北雑本の音訳漢字の特徴に言及している点である。北雑本の音訳は常用字を選ぶことがあまり考慮されておらず、一方北訳本は常用字を選択する傾向があるとして、北雑本の祖本が北訳本よりも古いと結論付けているが、常用字・非常用字で音訳された具体例を示していない。

本稿筆者の調べたところによれば、北雑本と北訳本の音訳漢字の間には全777項中36項において異同が存在する⁹が、その内訳は次の通りである（異同のある文字のみを項番号とともに掲げる）：

二箇所以上の項に共通して見られる異同

北雑本“捨”、北訳本“舍”：8, 439, 549 北雑本“朔”、北訳本“擗”：173, 565, 570

⁷ 例えば東洋文庫本『回回館訳語』には来文があるが、雑字部分の祖本は、本節で今考えたように、もっと古い時代に成立している可能性がある。

⁸ 筆者は『高昌館訳語』の雑字統編と来文との関連について考察したことがある（更科2021）。

⁹ 但し、北雑本は第95, 96項の音訳漢字を欠き、北訳本は第775項の音訳漢字を欠く。その他北訳本は、第776, 777項を丸ごと欠いている。故に以上5項は、両本間の異同を確認することができない。

北雑本“克”、北訳本“革”：57, 110, 591 北雑本“把”、北訳本“巴”：289, 447, 539
 北雑本“必”、北訳本“比”：71, 256, 278 北雑本“姑”、北訳本“故”：343, 349

その他の異同

| | |
|---------------------|-------------------|
| 北雑本“几”、北訳本“期”：90 | 北雑本“孫”、北訳本“遜”：412 |
| 北雑本“比”、北訳本“必”：188 | 北雑本“替”、北訳本“梯”：521 |
| 北雑本“几”、北訳本“己”：271 | 北雑本“打”、北訳本“搭”：533 |
| 北雑本“里”、北訳本“力”：290 | 北雑本“黙”、北訳本“抹”：560 |
| 北雑本“蘇”、北訳本“束”：296 | 北雑本“稿”、北訳本“高”：572 |
| 北雑本“力”、北訳本“兕”：333 | 北雑本“額”、北訳本“阿”：613 |
| 北雑本“土”、北訳本“兔”：380 | 北雑本“木”、北訳本“米”：748 |
| 北雑本“法刺”、北訳本“非勒”：392 | |

北雑本の誤字

102「夏」tabistān：北雑本“他比思哈恩”。他本が“他比思他恩”に作るのが正しい
 528「線」rīštah：北雑本“墨石忒”。他本が“里石忒”に作るのが正しい

北訳本の誤字・脱字

507「卓」šīrah：北訳本“吏勒”、他本が“史勒”に作るのが正しい
 581「鉄」āhan：北訳本“罕”、他本が“阿罕”に作るのが正しい（北訳本は“阿”を脱す）

以上に見るように、両者の用字は常用度に関して大同小異であるように筆者には思え、北雑本が「常用字を選択することをあまり考慮していない」とする劉氏の主張は、少々理解に苦しむところがある。確かに、北雑本には、下に示す三条のように、明代群と一致する文字遣いも存在し、北雑本の祖本が古いとする劉氏の主張の裏付けになるかもしれない。

| テキスト略称：故宮 | 東洋 | 復旦 | 伯林 | 巴里 | 北雑 | 北訳 |
|-------------|----|----|----|----|----|----|
| 明代群 / 清代群：明 | 明 | 明 | 明 | 清 | 清 | 清 |
| 256「来」第一字 | 必 | 必 | 必 | 必 | 比 | 比 |
| 549「酒」第一字 | 捨 | 捨 | 捨 | 捨 | 舍 | 舍 |
| 613「文」第一字 | 額 | 額 | 額 | 額 | 阿 | 阿 |

しかしながら、全体的には、北雑本は、パリ本や北訳本と共通する用字法が多く、清代群の特徴を示している。その故、北雑本の成立が北訳本より早いという主張には同意しかねる。むしろ、音訳漢字の角度からは、5.2に述べたように、パリ国家図書館本の方が明代群に近い。

6. 乙種本と丙種本の差異

丙種本の回回館訳語は、ペルシャ語が音訳漢字のみによって示され民族文字（ペルシャ文字）を含まないという違いもあるが、語彙項目の内容そのものが乙種本とは大きく異なる。

既に述べているように、丙種本の語彙項目は674ある。各語彙項目に対する本田1963の語釈では、丙種本の語彙項目中、乙種本の側に対応する語彙項目があるものには、その乙種本語彙項目の番号を記しているが、そのようにして乙種本の番号が記載された語彙項目は全部で371項であり、丙種本の語彙項目数全体に占める百分比は約55%である。この371項が、乙種本と丙種本に共通する語彙項目であることになる。このほか、復旦本の増補語彙に見える語彙項目が2、3あり¹⁰、また本田1963が指摘していない乙種本との共通項もわずかにある¹¹。更に、丙種本の語彙項目中で複合語やフレーズを構成する語が乙種本では単独の語項目となっているものまで含めると、乙種本と丙種本の共通語彙はいっそう増えると思われる。

音訳漢字の面から見て、丙種本は乙種本と深い関係がある。乙種本と丙種本の共通語彙のうち、見出し漢語・音訳漢字の双方が完全に一致する項が89あり、他に9項において、同一のペルシャ語単語を全く同じ音訳漢字で表記した語の例が見つかる。他の項には乙種本との間に文字の異同があるが、異同の多くは組織的な改変の結果である。10以上の並行した例がある異同事例には次のようなものがある：

(乙)石→(丙)失：28例。例：「肉」gūšt、(乙)鍋石忒(544)；(丙)鍋失忒(1523)

(乙)黒→(丙)誑：25例。例：「月」māh、(乙)媽黒(3)；(丙)媽誑(1016)

(乙)勒→(丙)力：14例。例：「林」jangal、(乙)展革勒(77)；(丙)展革力(1052)

(乙)百→(丙)白：13例。例：「雪」barf、(乙)百兒夫(10)；(丙)白兒伏(1022)

(乙)夫→(丙)伏：12例。例：「日」āftāb、(乙)阿夫他ト(2)；(丙)阿伏他ト(1015)

(乙)巴→(丙)把：12例。例：「風」bād、(乙)巴得(6)；(丙)把得(1018)

乙種本、丙種本において記述されたペルシャ語の特徴、及び両本の音訳上の特徴については、田坂1944が夙に指摘している。田坂1944は、特徴を箇条書きにし、それぞれ例を挙げながら極めて詳細に論じているが、各条冒頭の見出し部分を現代仮名遣いに直して抄録すると次の通りである：

イ、【乙種・丙種の音訳漢字は一引用者】発音に即して漢音訳したものであって、

¹⁰ 「2、3」とぼかした表現をした理由は、3項のうちの1項は2語から成るフレーズであり、復旦増補語彙にはこの2語のうちの1語のみで立項されているというケースであるためである。

¹¹ 例えば丙種本1047「里」買勒は、本田1963では未比定であり、対応する乙種本の項目番号も挙げていないが、劉2008:407は本項を乙種本797「里」黙兒勒(marrah)と関連付けている。本稿筆者もこの意見に従う。

原語の文字の構成に基づいて漢音をあてたものではないこと。

ロ、語尾の ān(ām), ūn(ūm), īn(īm)の音訳法。

ハ、短母音を伴う語尾の n・m【中略一引用者】は、乙丙両書とも、n・mを語尾に有する漢字を以て写した。

ニ、活用語たる動詞は概ね現代不定法即ち語尾に tan, dan を有する形が選ばれ、両書とも、tan は「貪」、dan は「丹」によって音訳している。

ホ、語尾に n(m)を有する漢字の音訳上の特例。

ヘ、iqāfa¹²の使用法。

ト、乙丙両種本に於て、漢訳を等しくしながら原語を異にするもの、少数ながら漢訳を異にしながら原語を等しくするもの。

チ、回回館訳語に含まれているアラビア語。

リ、乙本に見えたる十二支。

このうち、ロ、ホ、ヘ、トは、音訳漢字における乙・丙両種本の差異に言及しているので、以下、本稿の立場から紹介・検討したい。

ロについて。田坂氏（田坂1944:543）は乙種本において、末子音 -n/m を表記するのに“恩”（ān(ām), ūn(ūm)の場合）または“尹”（īn(īm)の場合）という独立の漢字を用いるのに対し、丙種本では長母音の部分を含めた ān(ām), ūn(ūm), īn(īm)全体に対して一つの鼻音韻尾字を用いることを指摘している。田坂氏は例を12個挙げているが、それが全てなのではなく、本稿筆者が見るところ全体で23の例がある。一部田坂氏の挙例と重複するが、説明のためにいくつか例を挙げる：

◆ ān(ām)の対音

「牙」dandān：(乙)胆搭恩 (309)；(丙)胆当 (1473、但し漢語見出しは「齒」)

「棗」čibyān：(乙)赤卜阿恩 (436)；(丙)尺卜昂 (1169)

◆ ūn(ūm)の対音

「車」gardūn：(乙)革兒都恩 (489)；(丙)克兒東 (1306)

「祿」marsūm：(乙)默兒蘇恩 (883)；(丙)默兒松 (1524、但し漢語見出しは「俸」)

◆ īn(īm)の対音

「地」zamīn：(乙)則米尹 (46)；(丙)則民 (1038)

「甜」šīrīn：(乙)史里尹 (561)；(丙)湿林 (1538)

例から知られるように、乙種本で「長母音 + n/m」を漢字音訳する場合には、「開尾韻字¹³ + “恩”/“尹”」という複合の形式が用いられる。これに対し、丙種本において

¹² 原文では izāfa と記してあるけれども引用に当たって本稿での転写方式に統一した。以下同じ。

¹³ ここに言う「開尾韻字」は古入声韻母字を含む。本稿では論証を省いているが、『回回館訳語』を含め、

は、乙種本で「尹」が用いられた音連続 (in(īm)) には -in 韻母字 (深臻撰三等字。具体的には「民林」) が用いられ、「恩」が用いられた音連続のうち ān(ām) には -ang 韻母字 (江宕撰字。具体的には「邦当湯囊郎藏張剛康杭昂良洋汪」) が、ūn(ūm) には -ong 韻母字 (通撰字。具体的には「東通松龍」) が、それぞれ用いられることが多い¹⁴。この現象について、本稿筆者はかつて、更科2019の中で、丙種本『女真館訳語』の音訳漢字に見られる平行した現象 (a + -n, u + -n の音訳に限って -ng 韻尾字が用いられる傾向) を解釈し、丙種本『回回館訳語』の今問題にしている例も援用しつつ、-n の表記に -ng 韻尾字が用いられる条件を「奥舌母音」と確定した上で、「ペルシャ語の長い奥舌母音 ā, ū や女真語の奥舌母音 a, u の奥まった聴覚印象が、丙種本の音訳者をして、たとえ鼻音の調音点が不正確に音訳されることを犠牲にしても、同様に主母音がより奥まって響く漢語 -ng 韻尾字を選択せしめた」との仮説を提示した (更科2019:91)。更科2019は、乙種本と丙種本の音訳手法の差異という視点から、民族文字からの転写的な音訳に傾く乙種本に比して、丙種本の音訳がより聴覚印象に頼っていると指摘している。『回回館訳語』の -n の音訳における乙・丙種本の差異も、ペルシャ語や漢語の音韻体系の相違が反映したものではなく、両本の音訳手法の差異の現れであると見たい。

ホについて。田坂氏が指摘するのは、ペルシャ語の語中の重ね子音 -ll- あるいは単子音 -l を示すのに「-n 韻尾字 + 来母字」の二字を以てする例が存在することである。例：

「使」 ilcī : (乙) 以里赤 (144) ; (丙) 引力尺 (1397、見出し漢語は「使臣」) (*注)

「山頂」 qullah : (乙) 項無し ; (丙) 滾勒 (1068)

*注 : 「使」の例は、丙種本が「-n 韻尾字 + 来母字」の例となっている一方、乙種本は「開尾韻字 + 来母字」となっており、ここで討論する例とはなっていない。

田坂氏は18個の例を挙げているが、興味深いことにそのうちの16までが丙種本の例であり、且つ多くは乙種本に対応する項がない語項目である。つまり、乙種本の音訳漢字を参照した可能性がない、丙種本オリジナルの音訳漢字に集中的に表れているの

『華夷訳語』の甲、乙、丙種本の音訳漢字においては、古代漢語の入声韻尾 -p, -t, -k の別は、原則として民族言語の音訳に全く反映されない。華夷訳語の音訳漢字の漢語基礎音系においては、元代の『中原音韻』(1324)、朝鮮四訳院漢学書の諺解本 (例えば『老乞大』『朴通事』諺解の諸テキスト) のハングル注音 (右側音・左側音とも)、明末の『重訂司馬温公等韻図経』(1606) や『西儒耳目資』(1626) 等がそうであるのと同様 (そして明初の『洪武正韻』(1375) とは異なって)、入声韻尾はすでに消滅したか、少なくとも口腔内調音の別を失っていたと考えられる。

¹⁴ 丙種本にも複合形式の音訳が全く見られないわけではない。田坂1944:544にも指摘があるが、「長母音 + -n/m」に対して「開尾韻字 + “音”」を用いた例がいくつかある。例えば、「中国」cīn、(乙) 赤尹 (986) に対し (丙) 痴音 (1087) ; 「阿芙蓉」afyūn、(乙) 項無しに対し (丙) 阿伏欲音 (1199) ; 「衙門」divān、(乙) 項無しに対し (丙) 揲窒音 (1279)、などである。

である（このことを田坂氏自身は指摘していない）。この種の音訳の産生メカニズムについて、田坂氏は、「当面の文字の語尾 n(m)はこの l 音に同化せしめられて、一般的には l の促音的発音、【中略—引用者】従って語尾 n(m)は後続する l 音に支配されて l 音に変化した、若くは後続する l 音に吸収されたといふことができる」と説明している（田坂1944:546）。実際のところ、これと酷似した音訳法は丙種本的一篇を成す『畏兀兒館訳語』における、ウイグル語に対する音訳漢字にも見いだされる（更科2003:8より引用。再構形は庄垣内1984によっている）。

| 見出し | 音訳漢字 | 再構形 |
|-----|---------|-------|
| 路 | 97.院力 | yol |
| 智謀 | 765.阿良礼 | ayil |
| 金 | 768.奄里吞 | altun |
| 風 | 6.硯勒 | yäl |

この表記法は、前字の -n 韻尾と、後字の l 声母の連続によって音節末の -l を表現したもので、更科2003では、これを斎藤1989の所謂「子音重複表記」であると論じた。これと同様の表記手法は、丙種本『回回館訳語』をも特徴づけるものである。

へについて。ペルシャ語文法に言う *idāfa*（エザーフェ）とは、名詞に語尾 -i を接尾し、後続の要素との間に修飾関係（後続要素が、-i を附した要素を限定（修飾）する関係）を構成する手続きのことである。『回回館訳語』での *idāfa* の音訳方式については、田坂1944:547がその全ての例を挙げつつ、十分に明らかにしているから、ここで詳しくは説明せず、ただ田坂氏が挙げている例から一つの対をとりあげて簡略に説明するにとどめる。

「月」*māh* 媽誥 (1016) ; 「来月」*māhi-āyandah* 媽吸-阿演得 (1116)

…例はいずれも丙種本

「月」の例に用いられた“誥”は、丙種本において単子音 *h* の表音に頻用される音訳漢字であるから、“媽誥”全体では *māh*（ペルシャ語で月の意）が音訳されていることは疑いがない。同じ「月」を意味する語が、「来月」の例では“媽吸”と表記されている。“吸”は深摂三等入声字（曉母緝韻）で、当時の漢語で *i* 韻母を有していたと考えられる（末尾に声門閉鎖を伴った可能性もある）。従ってペルシャ語の -h ではなく -hi を表したと考えられるのである。*māhi-āyandah* は、“a mouth to come”（本田1963:38）と逐語訳でき、後部要素 *āyandah* は“未来、将来”の意味（劉2008:419）であるから、複合語全体を日本語で解釈するなら「月-(その)←来たる」となって、後部要素が前部要素を修飾する関係であることは明瞭である。今「-(その)」と訳した部分が *idāfa* の -i に相当する。

本稿の観点から重要なことは、田坂氏の挙例からもうかがわれるが、*idāfa* が音訳された例が、ほとんど丙種本にばかり出現することである。もっとも田坂氏によれば、全体的に見れば、乙種・丙種を通じ、*idāfa* はむしろ音訳漢字上に反映されない方が多く、「この法則の使用されてゐる方がより少数であるとの印象を受けた」（田坂1944:547）とのことであるが、とにかくも丙種本に *idāfa* の音訳例が多く現れ、乙種本にはほとんど現れないことは、丙種本が口頭通訳養成を目的とした会同館で使われた教材で、そのために乙種本に比して実際の口頭言語をより多く反映していることを示すものであるように、本稿筆者には思われる。

トについて。田坂氏（田坂1944:550）は、乙丙両本のペルシャ語音形式（音訳手法ではなく）が相違している例や「古語・俗語及び方言」の混入、また見出し漢語に見えるペルシャ語からの借用語や、逆に漢語からペルシャ語に翻訳された語彙など、さまざまな問題について、具体例を挙げて論じているが、本稿の観点から注目すべきは、乙種本と丙種本とを比べて、ペルシャ語原語の音形が異なっているとされる若干の例に対する言及である。田坂氏が挙げる例には、例えば次のようなものがある：

「丹墀」*bārgāh*、(乙)巴兒嚙黑 (374)；(丙)把兒嘎 (1276、漢語見出しは「朝廷」)

「狐」*rūbāh*、(乙)魯巴黑 (388)；(丙)羅把 (1213)

「象」*fīl*、(乙)非勒 (379)；(丙)批力 (1210)

「茄」*bādinjān*、(乙)把廷扎恩 (447)；(丙)把頂剛 (1159)

田坂氏の説明によれば、「丹墀」と「狐」の例は語末の *-h* の有無の違い¹⁵、「象」の例はアラビア語的な *f*- とペルシャ語的な *p*- の違い（引用者注：「象」*fīl* はアラビア語からの借用語（本田1963:15、劉2008:168））、そして「茄」の例は第三音節の頭子音を *-j*- とするか *-g*- とするかの違いであるという。本稿筆者には、『回回館訳語』が基づいているペルシャ語形の来歴や基礎方言について、議論に必要な知識がないので、田坂氏の指摘を深めることはできないが、このように、乙種本と丙種本が基づいたペルシャ語の原語が異なっていると見られる例が少数ながら見つかることは、両本の成立を考察する上で興味深いことである。そして、「象」の例に見られるように、丙種本の形式の方が、乙種本よりも“ペルシャ語化”されている点などは、やはり丙種本の口語性を反映していると言える。

以上の他にも、乙種本と丙種本の音訳漢字には、更に次のような差異が指摘できる。

(1) 語末の *-g* の表記。乙種本“克”に対し丙種本“革”。この例は9例ある。今、そのうちの2例を挙げる：

「犬」*sag*；(乙)塞克 (391)；(丙)塞革 (1225。見出し漢語は「狗」)

¹⁵ このほか、「狐」については、田坂氏は触れていないが、主母音 *ū* の音価の違いも見取れる。

「色」rang : (乙)郎克 (605) ; (丙)郎革 (1591。見出し漢語は「顔色」)

この種の例はおおむね語末の -g の表記例である。“克”は溪母字であり通常ペルシヤ語の無声子音 k の表音に用いられることが期待され、一方“革”は見母字であり通常ペルシヤ語の有声子音 g の表音に用いられることが期待される。このことから見て、ペルシヤ語の語末の -g は、乙種本では無声化し、音訳者には -k のように受け止められ、一方丙種本では -g のまま受け止められた、と解釈できる。

(2) 丙種本では、ペルシヤ語の短母音 a の表記に -ai を用いることがある。例：

「塩」namak : (乙)納黙克 (548) ; (丙)乃黙克 (1533)

「首」sarvar : (乙)塞兒斡兒 (824) ; (丙)塞兒外兒 (1396。見出し漢語は「頭目」)

「西瓜」xarbut : (乙)黑兒卜子 (859) ; (丙)海兒卜子 (1150)

上記の乙・丙対照例では、乙種本で a を表すのに“納”(咸攝入声一等)、“斡”(山攝入声一等)、“黑”(曾攝入声一等)など開尾韻の字を選んでいるのに対し、丙種本では“乃”(蟹攝一等)、“外”(蟹攝二等)、“海”(蟹攝一等)など蟹攝、即ち -ai 韻の字が選択されている。ペルシヤ語には短母音 a とは別に二重母音 ai が存在し、その表記には乙・丙とも蟹攝字が用いられる(例：「他」vai : 乙(186) = 丙(1390) “歪”¹⁶)。丙種本でペルシヤ語の ai ばかりでなく a の表音にも時折 -ai 韻が選択されたのは、記録されたペルシヤ語の a が時に前寄りの [æ] ないしは [ɛ] のように響いたことを示すのではないかと推測される。

(3) 乙種本には、音訳漢字から帰納されるペルシヤ語音(主として短母音)が現代ペルシヤ語とは食い違っているものが一定数あるが、それらの語のうち丙種本との共通項であるものについて丙種本と比較してみると、全体の半分ほどについて、丙種本の形が現代ペルシヤ語形と一致する。今、丙種本の示す形が現代ペルシヤ語と一致する語彙項目と、乙種本と一致し現代ペルシヤ語とは食い違う語彙項目の例を4つずつ挙げる。

【丙種本の音訳漢字が現代ペルシヤ語と一致する例】

「春」bahār : (乙)卜哈兒 (101) ; (丙)白哈兒 (1092)

「瑪瑙」jaz¹⁷ : (乙)止則額 (588) ; (丙)者則額 (1560)

「狼」gurg : (乙)克兒克 (843) ; (丙)谷兒革 (1212)

「皇后」malikah : (乙)木里克 (977) ; (丙)默里克 (1403。見出しは「天皇后」)

【乙種本と丙種本の音訳漢字の示す音価が一致し、現代ペルシヤ語とは食い違う例】

¹⁶ 歪は中古佳韻二等合口で蟹攝に属するが、曉母であるから vai の音訳字としては音が合わない。しかし、現代漢語音 wāi とは符合することから、『回回館訳語』の音訳の基礎となった漢語では、既に現代語と同じく /·uai/ という音形を持っていたと推測できる。

¹⁷ 本田1963は jiz' と転写しているが今劉2008:250に従う。

「秋」zamistān : (乙)即米思他恩 (104) ; (丙)即米思湯 (1095)

「樹」diraxt : (乙)得勒黑忒 (425) ; (丙)得勒誡剌 (1152)

「轡」ligām : (乙)魯噶木 (494) ; (丙)魯剛 (1358。見出しは「主勞」¹⁸⁾)

「高」buland : (乙)百藍得 (724) ; (丙)白藍得 (1631)

前者の例、即ち丙種本の音訳漢字が現代ペルシャ語と一致する例は、丙種本と乙種本が基づいているペルシャ語が異なっていることを示す。

以上みたように、乙種本と丙種本は音訳の手法にいくつかの組織だった違いがあり、その中には教材としての乙種本と丙種本の性質の違い（乙種本は文字の習得と文書の作成能力の涵養が念頭にあり、一方丙種本は口語の習得が念頭にある）を反映する部分もある。その他、両本が基づくペルシャ語の性質の違いをうかがわせる用例もいくつか見出される。しかしながら、全体として見る時、乙種本と丙種本のペルシャ語に目だった違いはなく、音訳の原理も共通部分の方がはるかに多い。諸先行研究は、田坂氏の先駆的研究以来、乙種本と丙種本を同時に扱うものが多いが、それは基本的に妥当な態度であったと評価できる。

なお、更科2002において指摘した乙種本音訳漢字の声調分布の傾向は、丙種本においてもおおむね当てはまるが、去声字に関しては、乙種本ほど明瞭な傾向を示さなくなる。特に乙種本と丙種本に共通して見られる項（異なり語数14語）で比較した場合には、丙種本でも同様に去声字が用いられた例は

「双」juft (乙)住夫忒 (665) (丙)住伏忒 (610)

の1例しかなく、他の13例は、去声以外の字が用いられている。中でも、下に示す例のように、入声が変わりに用いられている例が目立つ。

「花」gul (乙)故勒 (431) (丙)谷力 (144)

「玉」yašm (乙)夜深 (579) (丙)藁深 (549)

「粗」durušt (乙)堵路石忒 (687) (丙)都六失忒 (638)

一方で、乙種本では去声字以外が用いられるところで丙種本では去声字が用いられている、あるいは乙種本には存在せず丙種本のみ存在している項目の中で去声字が用いられている例も20例あり、それらの用例の去声字の多くは単音節語または複音節語末音節のいずれも短母音を含む音連続を音写している（例省略）。これは乙種本の声調分布傾向の(4)と一致している。

¹⁸⁾ 本田1963は本項を未比定としているが、ここでは劉2008:462が乙494と同一語に比定しているのに従う。なお丙種見出し漢語の「主勞」は明代の蒙漢対訳語彙『登壇必究訳語』に著摟、『薊門防禦考』に扯撈、『盧龍塞略』に扯羅など見えるのとおそらく同じ語で、蒙古語 *jiluyun* “(轡头上的) 扯手、繩”（《蒙漢詞典》内蒙古大学出版社，1999年）からの借用語である。

7. 丙種本の音訳漢字の内部差異

前に述べたように、丙種本には静嘉堂本、阿波国本、ロンドン本、袁氏本など種々のテキストがある。うち袁氏本は田坂1943, 44, 51及び本田1963が参照していない一方で、劉2008が底本としている。

今、本田1963の校勘記を用いて、静嘉堂本、阿波国本、ロンドン本を袁氏本と照らし合わせることによってこれら四本の音訳漢字の異同状況の親疎関係を比較してみると、阿波本と静嘉堂本が一系列を成し、ロンドン本と袁氏本が別の一系列を成すことがわかる。

(1) 袁氏本がロンドン本と一致し、阿波本・静嘉堂本とは異なっている用字。この事例は22ある。紙幅の関係上、ここでは最初の7例のみを挙げる。

| 見出し | ペルシャ語 | ロンドン本 | 袁氏本 | 阿波本 | 静嘉堂本 |
|--------|---------|-------|------|--------------------|------|
| 1028日蝕 | kusūf | 苦蘇伏 | 苦蘇伏 | 苦速伏 | 苦速伏 |
| 1029月蝕 | xusūf | 虎蘇伏 | 虎蘇伏 | 虎速伏 | 虎速伏 |
| 1051籬 | tuvārah | 忒瓦兒 | 忒瓦兒 | 忒窰兒 | 忒窰兒 |
| 1098日 | rūz | 羅子 | 羅子 | 阿伏他卜 ¹⁹ | 阿伏他卜 |
| 1105寒 | sarmā | 塞兒媽 | 塞兒媽 | 塞林媽 | 塞林媽 |
| 1115今月 | īn māh | 因-媽誑 | 因-媽誑 | 音-媽誑 | 音-媽誑 |
| 1156香 | būy | 波亦 | 波亦 | 跛赤 ²⁰ | 跛亦 |

(2) 袁氏本が阿波本もしくは静嘉堂本（あるいはその双方）と一致し、ロンドン本とは異なっている用字。8例があるが、その多くはロンドン本の誤記あるいは顛倒である。ここでは、ロンドン本の誤記・顛倒・その他の例を計4つ挙げる。

| 見出し | ペルシャ語 | ロンドン本 | 袁氏本 | 阿波本 | 静嘉堂本 |
|------------------------------|-----------------------|-------|-----|-----|------|
| 1100早 | ṣabāh ²¹ | 塞把兒 | 塞巴黑 | 塞把誑 | 塞把誑 |
| * 第三字を“兒”に作るのはロンドン本のみに見られる誤記 | | | | | |
| 1232蟹 | saraṭān ²² | 塞兒海 | 塞兒湯 | 塞兒湯 | 塞兒湯 |
| * 第三字を“海”に作るのはロンドン本のみに見られる誤記 | | | | | |

¹⁹ ロンドン本と袁氏本の“羅子”は年月日の「日」を表す rūz を音訳したものであり、一方阿波本と静嘉堂本の“阿伏他卜”は「太陽」を意味する āftāb を音訳したものである。本項は時令門にある語彙項目であり、意味的にはロンドン本・袁氏本の“羅子”の方が適切である。

²⁰ 阿波国本の第二字“赤”は“亦”の明らかな誤記。

²¹ 本田1963:38は saḥar “the early morning” を比定し、劉2008:417も本田氏の比定に従っているが、本稿筆者は音訳漢字とより符合する ṣabāh 「朝、暁」（北京大学东方语言文学系波斯语教研室編《波斯语汉语词典》，商务印书馆，2012年）を比定したい。

²² 本田1963:42は比定語を示さないうままロンドン本の“塞兒海”を採用しているが、ここでは劉2008:444が比定する saraṭān 「蟹、癩」（<アラビア語 سرطان）を採る。

1527麵 ārd 阿得兒 阿兒得 阿兒得 阿兒得

* ロンドン本は第二字と第三字の顛倒

1547行粮 zād-rāhilah 咱得-喇誑勒 咱得-刺黑勒 咱得-刺誑勒 咱得-刺誑勒

(3) 袁氏本の用字が他の三本と異なっている例。この種の例は大変多く、組織的なもの（つまり、他本で音訳漢字 A に作るものが袁氏本では B に作るといった対応関係が複数の音訳語に共通して見られるもの）だけで17の事例がある（紙幅の都合で、例の一つ一つを挙げることは省略する）。

袁氏本“忙”、他本“媽”（6例、4語） 袁氏本“付”、他本“伏”（4例、4語）

袁氏本“馬”、他本“媽”（6例、6語） 袁氏本“希”、他本“吸”（5例、4語）

袁氏本“塔”、他本“他”（10例、9語） 袁氏本“飢”、他本“吉”（2例、2語）

袁氏本“巴”、他本“把”（25例、22語） 袁氏本“顆”、他本“科”（3例、3語）

袁氏本“的”、他本“得”（39例、36語） 袁氏本“忽”、他本“乎”（3例、3語）

袁氏本“黑”、他本“誑”（29例、27語） 袁氏本“你”、他本“匿”（9例、9語）

袁氏本“列”、他本“力”（5例、5語） 袁氏本“梯”、他本“剔”（3例、3語）

袁氏本“緘”、他本“革”（6例、6語） 袁氏本“唾”、他本“丫”（2例、2語）

袁氏本“舍”、他本“捨”（5例、5語）

これらの事例は、現在知られている丙種本『回回館訳語』の諸本の中での袁氏本の独自性を示すものであるが、用例を検討してみると、袁氏本のこれらの音訳漢字の多くは、ある特定の音音条件に限って用いられるのに対して、他本にはそのような条件がなく、どの位置でも一つの音訳漢字に統一されていることがわかる。

ある場合には、袁氏本では語中の位置によって二つの音訳漢字を使い分けているが、他の丙種本では一つに統一されている。例：

（以下の例示において、“単”は単音節語用例、“頭”は多音節語の頭音節用例、“中”は三音節以上から成る語の中間音節用例、“末”は多音節語の末音節用例の略）

◆ mā 対音字

（袁氏本）“媽”…単・末；“馬”…頭・中

（他本）“媽”…全ての場合

* 袁氏本の“媽”（北京語陰平字）と“馬”（上声字）の書き分けは、5.1に述べた乙種本の声調分布の傾向(1)、(2)、(3)に合う。

◆ tā/tā 対音字

（袁氏本）“他”…中・末（但し、中間音節用例は疑わしい2例のみ）；“塔”…頭・中

（他本）“他”…全ての場合

*“他”は平声字（清平声）、“塔”は上声字（清上声）である。5.1に述べた乙種本の声調分布の傾向と照らし合わせるならば、“他”は(1)、(3)に合うが、“塔”は(5)とは合わず、むしろ(2)の上声字の傾向に合致する。あるいは“塔”の字は、当時すでに現代北京語と同じく上声に読んでいたのかもしれない。

◆ ša(h) 対音字

(袁氏本) “捨” …頭（開音節）；“舍” …単；頭（閉音節）

(他本) “捨” …全ての場合

*“捨”は上声字、“舍”は去声字である。袁氏本の“捨”は5.1に述べた乙種本の声調分布の傾向(2)に合う。“舍”は、単音節語の例については傾向(4)に合うが、複音節語の頭音節の表記にも用いられる点が傾向(4)に反する。複音節語の頭音節では、開音節の場合に“捨”が、閉音節の場合に“舍”が用いられる傾向がある。

◆ kū 対音字

(袁氏本) “科” …単；“顆” …頭

(他本) “顆” …全ての場合

*袁氏本の“科”（平声字）と“顆”（上声字）の書き分けは、5.1に述べた乙種本の声調分布の傾向(1)、(2)、(3)に合う。

ある場合には、長母音か短母音かによって使い分けがなされる。

◆ hi/hī 対音字

(袁氏本) “希” …末・長母音（hī）；“吸” …末・短母音（hi）

(他本) “吸” …全ての場合

*袁氏本の“希”（平声字）と“吸”（入声字）の書き分けは、5.1に述べた乙種本の声調分布の傾向(1)、(3)、(5)に合う。

◆ gi/gī 対音字

(袁氏本) “飢” …単または末・長母音（gī, kī）；“吉” …単または末・短母音（gi）

(他本) “吉” …全ての場合

*袁氏本の“飢”（平声字）と“吉”（入声字）の書き分けは、5.1に述べた乙種本の声調分布の傾向(1)、(3)、(5)に合う。なお、gi/gī 対音において、頭、中の位置では全ての本で“幾”が用いられ、異同はない。これも声調分布の傾向(2)に合う。

◆ hu(xu)/hū(xū) 対音字

(袁氏本) “忽” …短母音（hu, xu）；“乎” …長母音（hū, xū）²³

(他本) “乎” …全ての場合

*以上の例は全て単または末の例である。袁氏本の“忽”（入声字）と“乎”（平声

²³ 但し、短母音を含む xu に対音する例外が全用例5つのうち2つある。

字)の書き分けは、5.1に述べた乙種本の声調分布の傾向(1)、(3)、(5)に合う。

ある場合には、丙種本の他の本で二つ(以上)の異なるペルシャ語音の対音字として用いられているのに対して、袁氏本では音訳漢字を使い分けている。

◆ d, dah 対音字

(袁氏本) “的” …d 対音; “得” …dah 対音

(他本) “得” …全ての場合

◆ 「x(h, h) + 母音 i, ī, a」 対音字

(袁氏本) “黒” … 「x(h, h) + i, ī」 対音及び単子音(x, h, h) 対音; “誡” … 「x(h, h) + a」 対音及び単子音(x, h, h) 対音

* 単子音 x(h, h)の対音字としては、“黒”と“誡”の用例がそれぞれ20例ずつあり、使い分けの規則は発見できない

(他本) “誡” …全ての場合

他本で“誡”が用いられていて袁氏本では“黒”が用いられる例は、29例27語がある。27語のうち19語は単子音(x, h, h)を表記した例であり、8語は「x(h, h) + 母音」を表記したものである。注目されるのは、CV連続を表記した8語のうち7語までが、hi, hī, xi, xwīなど、母音iもしくはīを帯びており、i, ī以外の母音を帯びる例は1例(xaに対応する)のみであることである。『回回館訳語』の乙種本においては、単子音x, h, h、及びこれらの子音に短母音aが結合したCV連続を表記するには“黒”が用いられている。そして、これらの子音にi, īが結合したCV連続に対しても、同様に“黒”が用いられる。この“黒”に相当するのが丙種本の“誡”であり、袁氏本では、他本で“誡”が用いられているところの一部に、“黒”が用いられている。他方、袁氏本でも“誡”が用いられた例には49例33語がある。そのうちの31例20語は単子音(x, h, h)の表記例であり、18例13語はCV連続(ha9例、xa3例、hā1例。hāの例は母音の対応が例外的である)である。

| 漢字 | 用例総数 | x, h, h | hi, xi | hī | xwī | ha, xa | 例外対音 |
|----|------|---------|--------|----|-----|--------|------|
| 誡 | 33 | 20 | | | | 12 | 1 |
| 黒 | 27 | 19 | 5 | 1 | 1 | 1 | |

袁氏本以外のテキストでは、ha, xa と hi, xi, hī, xwī という、母音はかなり異なった音連続に対して、同じ“誡”の字をあてている。これは乙種本も同様である。袁氏本では、母音i, īを含むhi, xi, hī, xwīについては“黒”をあて、一方母音aを含むha, xaについては、他本と同じ“誡”をあてることにより、区別を図ったようである。

ところで、袁氏本以外のテキストで、“誡”がi/īとaという非常に違った母音を含む音連続の表記に兼用され得たのはなぜであろうか。“誡”は『広韻』虎伯切、陌韻

二等合口曉母であり、一方“黒”は、『広韻』虎北切、徳韻一等開口曉母である。つまり前者は梗撰、後者は曾撰の入声字である。現代北京語の-k入声字に文白異読が存在することは周知の事実で、文語音では、梗撰二等と曾撰一等はともに -e, -uo 韻母を取るが、口語音では、梗撰二等は -ai を取り、曾撰一等は -ei 韻母を取ることが知られている。例：

梗撰二等：伯、(文語音)bó/(口語音)bǎi

曾撰一等：得、(文語音)dé/(口語音)děi

一方で、明代資料や現代の官話系方言の一部には、梗撰二等・曾撰一等がともに ei 類の韻母となって区別がない体系が存在する。例えば『翻訳老乞大・朴通事』の左側音²⁴がそうである：

梗撰二等：百 bǎi'、宅 jǐyǐ'、客 kǎi'、核 hǎyǐ' など

曾撰一等：北 bǎi'、賊 jǐyǐ'、黒 hǎyǐ' など (例外：脉 mǎi')

思うに、『回回館訳語』の音訳漢字“誡”“黒”には、文語音系の単母音韻母の読みと、『翻訳老乞大・朴通事』の左側音がそのような ei 類の二重母音韻母の読みとが共存していて、前者はペルシャ語の短母音 a を含む xa, ha などの音訳に用いられ、後者はペルシャ語の i, ī を含む hi, xi, hī, xwī などの音訳に用いられたのではなからうか。袁氏本が基づいた漢語でもこの二つの字音の状況そのものは同様であったが、ただ“誡”は -a を含む音連続に、“黒”は -i/ī を含む音連続にという具合に区別を設けたのではないか (その区別は、人為的なものであったかもしれない)。

◆ 「g(q) + 母音i, ī, a」の対音字

(袁氏本) “械” …g, qī, qī, qa 対音；“革” …g, q, ga, qa(h), qī 対音 (子音の例外的対音：γ, gi, kah)

(他本) “革” …全ての場合

* 他本の“革”が、袁氏本では“械”と“革”の二字と対応する。その対音状況は、上記の概観ではあまりはっきりしないので、それぞれの用例 (異なり語数) の数を見てもみよう。

| 漢字 | 用例総数/うち→ | g | q | qī | qī | qa | ga | 例外対音 |
|----|----------|----------|------|------|------|-------|------|------|
| 械 | 6 | 2 | | 1 | 2 | 1 | | |
| | | (百分比33.3 | | 16.7 | 33.3 | 16.7) | | |
| 革 | 45 | 14 | 11 | 1 | | 6 | 10 | 3 |
| | | (百分比31.1 | 24.4 | 2.2 | | 13.3 | 22.2 | 6.7) |

²⁴ 『翻訳老乞大・朴通事』左側音の検索には、遠藤1990を利用した。ハングルの転写方式も遠藤1990所載のものに従った。

袁氏本以外のテキストでは、qa, ga と qi, qī という、母音がかなり異なった音連続に対して、同じ“革”の字をあてている。これは乙種本も同様である。一方袁氏本の“械”と“革”の区別は、あまり明瞭ではないが、前項「x(h, h) + 母音 i, ī, a」対音字に見た“黒”と“誑”の場合と平行して、qi, qī に対して“械”を、qa, ga に対して“革”を、それぞれ用いていると言いうる。

以上のように見てくると、袁氏本は、他の丙種本が書き分けずに一つの音訳漢字を用いている多くの事例について、語中の位置や母音の長短（時に、開音節・閉音節の別）、その他の音声的条件に基づいて書き分けを行っているという点で、丙種本の中では異彩を放っていると言える。そして、語中の位置・母音の長短を条件とする音訳漢字の書き分けの多くは、乙種本の声調分布の傾向に合致していることが注意される。

8. おわりに

以上、『回回館訳語』『雑字』の音訳漢字の乙種本と丙種本に見られる異同について見てきたが、明らかになったことは以下の諸点である：

(1) 乙種本は、音訳漢字の異同状況、及びペルシャ語の子音 g の表記様相という観点から見て、大きく明代群と清代群の二群に分けられる。明代群の方が音訳漢字の声調分布の傾向に忠実である場合が多い。

(2) 乙種本と丙種本の音訳漢字を比較すると、かなり多くの相違点が見られる。その多くは音訳手法の違いに属しているが、両者が基づくペルシャ語の違いをうかがわせる例も少数ある。乙種本について見出された音訳漢字の声調分布の傾向は、丙種本においてもおおむね当てはまる。

(3) 丙種本に属する諸本の音訳漢字の異同を検討すると、ロンドン本と袁氏本が一系列を成し、阿波国本と静嘉堂本が別の一系列を成す。特に袁氏本の音訳は、他本には見られない文字の使い分けを行っており独自性が強い。

本稿では、分節音素の対音関係については、2002年の拙稿を十分に“再考”できなかった。今後の課題とし、別稿にまとめたいと思う。

附：『龍威秘書』所収『譯史紀餘』卷四「回回国書」について

丙種本回回館訳語を扱った縄田1976:76は、諸本を紹介する中、「華夷訳語の名こそないが、同様のものに龍威秘書「譯史紀餘」卷四「回回国書」（清、陸 浜雲【引用者注：浜雲は次雲の誤】著）がある」と注記し、またこの文献に関して縄田1974を参照することを求めている。縄田1974は『訳史紀餘』所収「回回国書」の全文の書影を

掲げ、40項ある全てのペルシャ語項目に対し、ペルシャ文字による語形、その音素記号²⁵、英訳を記している。

縄田1974が紹介している『訳史紀余』は、清の馬俊良が編纂した叢書『龍威秘書』の第九集『荒外奇書六集』の第三冊に収められているもので、同じ陸次雲の著『八紘訳史』に続けて収められている。日本の内閣文庫（現在の国立公文書館）に所蔵された『龍威秘書』（清乾隆～嘉慶年間刊本）は国立公文書館デジタルアーカイブスにより Web 上に公開され、全文のカラー写真を閲覧することが可能である。それによって見るに、『八紘訳史』には清の康熙癸亥（1683）夏に書かれた序文がある。『訳史紀余』に収録された「回回国書」は（丙種本ではなく）乙種本の『回回館訳語』の雑字部分から抄録されたものであると考えられる。各項は乙種本と同様、漢語見出し、ペルシャ文字、音訳漢字の三者を配置している。「回回国書」各項と乙種本『回回館訳語』との対応関係は次のようになっている（“「回回国書」の項番号と漢語見出し——対応する項の乙種本における同上”の形式で対応関係を示す。ペルシャ文字と音訳漢字は省略）：

◆天文門²⁶

1.天——1.天；2.日——2.日；3.月——3.月；4.星——4.星；5.雲——5.雲；6.風——6.風；7.雨——7.雨；8.露——8.露

◆地理門

9.山——41.山；10.河——42.河；11.月²⁷——43.江；12.星²⁸——44.海；13.土——45.土；14.地——46.地；15.京——49.京；16.国——50.国

◆時令門

17.春——101.春；18.夏——102.夏；19.秋——103.秋；20.冬——104.冬；21.早——105.早；22.晚——106.晚；23.朔——107.朔；24.望——108.望

◆人物門

25.君——138.君；26.臣——139.臣；27.聖——140.聖；28.賢——141.賢；29.父——147.父；30.母——148.母；31.親——154.親；32.師——158.師

◆鳥獸門

²⁵ 「音素記号」は縄田1974の表現のまま。本稿では、縄田氏自身が本資料に対して想定するペルシャ語形に対する音素表記と考えておく。全体に現代の標準ペルシャ語に近いが、rud “river” に対して kôh “mountain”、jôî “stream” など、現代のテヘランなどの標準ペルシャ語が失っている ū と ô の区別が反映されている。

²⁶ 「天文門」「地理門」などの門類名は乙種本に記されているものであり、『回回国書』には記されていない。

²⁷ 明らかに「江」の誤り。

²⁸ 明らかに「海」の誤り。

33.龍——376.龍；34.虎——377.虎

◆花木門

35.花——431.花；36.草——432.草

◆器用門

37.弓——467.弓；38.刀——472.刀

◆衣服門

39.衣——517.衣；40.冠——518.冠

このように、『回回国書』の見出し項目は乙種本と一致する。そして、ペルシャ文字と音訳漢字も、誤植を除き互いに一致する。

『回回国書』各項のペルシャ文字はかなり崩れていて誤りが多いが判読は可能である部分が多い。音訳漢字を乙種本と比べるとおおむね一致するものの、例えば人物門27/140「聖」「拍昂百」は、ベルリン本、東洋文庫本、復旦本など明代のテキストで“迫昂百兕”とするのとは異なって第一字を“拍”に作り、いずれも清代のテキストであるパリ国家図書館本、二種の中国国家図書館本（北雑本、北訳本）と一致する²⁹。「回回国書」はまた、時令門22/106「晩」の音訳漢字を“金榜嚙黒”に作っているが、第一字“金”は“舍”を誤ったに違いなく、“舍榜嚙黒”に作るベルリン本や北雑本、北訳本との近い関係を示唆する（一方、東洋文庫本、復旦本、パリ国家図書館本、台湾故宮本は“捨榜嚙黒”であり、第一字を“捨”に作る）。ペルシャ文字の字面について言えば、花木門431「花」gulのペルシャ文字gに三点がついているのは北京図書館蔵『回回館雑字』本及びパリ国家図書館本と共通の特徴である（一方、全ての明代テキスト及び北京図書館蔵『回回館訳語』本では、問題の字母は無点であって字母kと同形になっている）。以上から、「回回国書」といちばん近い乙種本のテキストは、北訳本、即ち清初同文堂抄本『回回館訳語』であると言える。全体に、本テキストが『回回館雑字』研究に付け加えることは何もないと言える。

因みに「回回国書」が収められた『訳史紀余』巻四は「外国書文」と題し、回回その他にも高麗国書、百訳【筆者按：即ち百夷】国書、高昌国書、緬甸国書、八百国書、韃靼国書、天竺国書を抄録している（回回国書は、高麗と百訳の間に位置する）。華夷訳語と関係するところが大きいので、下に内容を紹介しておく。

「高麗国書」は、漢文とハングルの対照になっている。漢文部分は朝鮮時代（李朝）の文人で小説『洪吉童伝』の作者とも伝えられる許筠（1569-1618）の五言古詩「送參軍吳子魚大兄還天朝」である。この詩は明末清初の錢謙益が編纂した『列朝詩集』

²⁹『回回国書』の音訳漢字は第4字“兕”を脱している。cf. ペルシャ語 *pairyāmbār* (本田1963:215)。

閩集第六³⁰に収録されているが、すでに漢字とハングルの対照の形式になっている。「高麗国書」はあるいは『列朝詩集』からの転載であろうか。このハングルは朝鮮漢字音による音読のようであるが、『列朝詩集』に収録された段階ですでに形が著しく崩れ、「高麗国書」では更に崩れている。かくして、「高麗国書」の内容は華夷訳語とは関係がない。

上述した「回回国書」以降「韃靼国書」までは、乙種本華夷訳語の雑字から一部の項目を抜き書きしたものであり、乙種本華夷訳語と同様、漢語見出し、民族文字、音訳漢字の三者が記されている。

「百訳国書」は、乙種本『百夷館訳語』から40項目を抜き出したものである。『百夷館訳語』の雑字は明代のテキスト（東洋文庫本、ベルリン本、復旦本、台湾故宮図明経廠本など）と清代のテキスト（パリ・アジア協会本、北京図書館清抄本、傅斯年図書館蔵清初同文堂鈔本など）とで百夷文字の綴り字が一部項目において大きく異なる。内閣文庫本「百訳国書」の百夷文字は形が大いに崩れ、字母の識別などは相当困難である場合が多いが、それでも「茶」「孔雀」「鴛鴦」「燕子」「皇帝」「兩」「分」などの項目で突き合わせてみると、百夷文字綴りは清代テキストと一致する。音訳漢字の面から見ても、「百訳国書」はパリ・アジア協会本、パリ国民図書館本、北京図書館清抄本、傅斯年図書館蔵清初同文堂鈔本など清代テキストとの一致を示す場合がしばしばある。更に、百夷という民族名を「百訳」と表記すること自体、明代テキストには見えず清代テキストに一般的であることから、「百訳国書」も乙種本の清代テキストから引き写されたものであることが推定される。

「高昌国書」は56項を含む。ウイグル文字は変形しているものの、見た瞬間にウイグル文字であると同定できる程度の形は維持されている。音訳漢字を乙種本『高昌館訳語』と対照したが、特段の異同がなく、どの本に近いということを指摘することは困難である。

「緬甸国書」は64項を含む。緬甸文字の形は著しくゆがんでいる。音訳漢字の乙種本との対照からは、やはりどの本とも特段の異同がなく、どの本に近いということを指摘することは困難である。西田1972:14は本テキストに触れ、「上記のテキスト【引用者注：乙種本『緬甸館訳語』の諸テキスト】から引用した質の極めて悪い見本」と述べている。

「八百国書」は56項を含む。八百文字の形はやはり著しくゆがんでいる。音訳漢字の乙種本との対照から見ると、パリ国民図書館本、British Museum 蔵明刊本 (Edkins

³⁰ 筆者が見た『列朝詩集』のテキストは生活・読書・新知三聯書店上海分店において1989年に刊行された影印本（詩歌総集叢刊・明詩卷）である。

旧蔵)、ベルリン本に比較的近い。

「韃靼国書」は16項を含む。回回以下の5種の「国書」が天文・地理・花木など複数の門類から語項目を数項目ずつ抜粋しているのとは趣を異にし、一月から十二月までの月の名と、「閏月」「年節」「四季」「時刻」の各項から成る。これは乙種本『韃靼館訳語』の中でも(雑字本編ではなく)増補語彙の「時令門」³¹からの抜き書きである。ウイグル式モンゴル文字は著しく歪められ、一見しただけではこれがウイグル式モンゴル文字であるとはわからないほどである。なお、この部分のモンゴル語の語彙は、上に言及した『八紘訳史』の巻四「韃靼」の条にも、「訳語」として記載されている³²。『八紘訳史』『訳史紀余』所載の月名は、元代の蒙漢対訳語彙である『至元訳語』にも見え、長田夏樹1953:92が夙に注目している古語である。

天竺国書は、乙種本では『西天館訳語』に当たる。『西天館訳語』は『西天真実名経』と題する仏經の梵文をその漢字音訳と対照させたものであるが、「天竺国書」に記されているのは『西天真実名経』そのものではなく、『西天館訳語』の一部テキスト(例えばベルリン本や、北京図書館蔵『増定華夷訳語』など)において『西天真実名経』の後ろに付せられ、テキストにより「続増」³³「続添西天字」³⁴などと題された「遍満三種世界具足智身妙吉祥具足有大慈大悲者汝為利益有情故誦真実名経真実名経大利唵麻聶巴呢吽」という漢文/梵文である。一字一字の漢字の左側に大きく梵文が書かれているが、この梵文がサンスクリット語であるのか、それとも漢文を音写したものであるのかは、筆者にはわからない。

『訳史紀余』に続く『荒外奇書六集』の第四・第五冊は『西番訳語』と題され、乙種本『西番館訳語』雑字の全740項が収録されている。チベット文字は乙種本の諸本におけると同じ字体で、形はかなり歪められているが原型はとどめている。音訳漢字から見ると、筆者が目撃し得た乙種本の諸本の中では京大文学部図書館蔵『西番訳語、暹羅訳語』(以下京大本)の西番訳語の部分と極めて近い本で、例えば通用門694「打発」の第三の音訳漢字を“文”に作ったり(正しくは“丈”)、宮室門233「寺院」の第一の音訳漢字を“夫”に作ったり(正しくは“失”)するのは京大本特有の誤りだが、『龍威秘書』所収の「西番訳語」はいずれも京大本と一致する。西田1970:19では、本「西番訳語」を、華夷訳語の一篇を成すテキストとしての『西番館訳語』のテ

³¹ 『韃靼館雑字』の増補語彙中この時令門を含むテキストに、国家図書館蔵明抄本『華夷訳語』、及び同じく国家図書館蔵明刻本『増定華夷訳語 韃靼館』(いずれも、書目文献出版社『北京図書館古籍珍本叢刊6経部』に影印を収める)がある。

³² 但し『八紘訳史』韃靼条の訳語は、この16項の前に「天」「地」「日」「月」が加わって計20項目を含む。また、モンゴル語は音訳漢字のみで書かれウイグル式モンゴル文字を欠く。

³³ ベルリン本の場合。

³⁴ 国家図書館蔵『増定華夷訳語 西天館』の場合。

キストの一種に数えており、これを乙種本の一異本として扱っている。一方、西田・孫1990において、孫宏開氏は、このテキストを『草地訳語』（“川十”）と名付け、故宫博物院蔵の九冊の『西番訳語』と並べた上で、記録された言語をチベット語アムド方言牧区話に属する“草地話”であるとした。しかし、このテキストは上引の西田1970が認識する通り、乙種本雑字から派生したものであって、清代乾隆年間に新たに編纂された九種の『西番訳語』と同列に並べるべきではない。西田・孫1990:41では、西田龍雄氏により、この訳語のテキストそのものが極めて粗雑で、資料としての価値が極めて低いと評価されている。それにもかかわらず、聶・孫2010は、本テキストについて、依然として孫宏開氏の見解に従ってこれを『草地訳語』（“川十”）と呼び、付録としてその漢語見出し、チベット文字のローマ字転写、音訳漢字を収録している。

参考文献

- 石田 幹之助 1944「所謂三種本『華夷訳語』の『韃靼館訳語』」, 石田幹之助(1973)『東亜文化史叢考』, 財団法人東洋文庫, 147-205頁所収。
- 遠藤 光暁 1990『《翻譯老乞大・朴通事》漢字注音索引』。中國語學研究『開篇』單刊No.3、好文出版。
- 長田 夏樹 1953:「元代の中・蒙対訳語彙『至元訳語』」。『神戸外大論叢』4、91-118頁。
- 齋藤 純男 1989:「中期モンゴル語漢字音訳文献における子音重複現象」。『日本モンゴル学会紀要』第20号、1-16頁。
- 更科 慎一 2002:「『回回館訳語』音訳漢字の声調体系」。『慶谷壽信教授記念中国語学論集』、好文出版、145-155頁。
- 更科 慎一 2003:「所謂甲種本華夷訳語の漢字音訳手法の一端」。東京都立大学人文学部『人文学報』341号、2003年、1-18頁。
- 更科 慎一 2019:「『華夷訳語』の音訳法の諸問題—『女真館訳語』を中心に—」。『山口大学文学会志』第69巻、67-94頁。
- 更科 慎一 2021:「ウイグル語学習書としての『高昌館来文』の性質について」、山口大学人文学部異文化交流研究施設『異文化研究』15巻、66-81頁。
- 庄垣内 正弘 1984:「『畏兀兒館訳語』の研究—明代ウイグル口語の再構—」。内陸アジア語の研究 I (神戸市外国語大学「外国学研究」16)、51-172頁。
- 聂 鸿音、孙 伯君 2010:《《西番译语》校录及汇编》。社会科学文献出版社。
- 任 萍 2015:《明代四夷馆研究》。北京师范大学出版社。
- 田坂 興道 1943, 1944, 1951:「『回回館訳語』語釈(一)、(二)、(三)」;「同」補正。

- 東洋学報30:1(1943a), 30:2(1943b), 30:4(1944), 33:3,4合併(1951)。
- 縄田 鉄男 1974:「MISCELLANEA PERSICA:(1) 龍威秘書『譯史紀餘』(清、陸次雲著) 卷四「回回国書」に見えるペルシャ語彙について」、Nidaba(西日本言語学会) 第3号、41-43頁。
- 縄田 鉄男 1976:「所謂三種本華夷訳語・ロンドン本回回訳語について」。熊本大学法文学会『法文論叢』第37号、74-104頁。
- 西田 龍雄 1970:『西番館訳語の研究』。松香堂。
- 西田 龍雄 1972:『緬甸館訳語の研究』。松香堂。
- 西田 龍雄、孫 宏開1990:『白馬訳語の研究:白馬語の構造と系統』。松香堂。
- 本田 實信 1963:「『回回館訳語』に就いて」。『北大文学部紀要』11、1-73頁。
- 刘 迎胜 2008:《《回回館雑字》与《回回館译语》研究》。中国人民大学出版社。